
義賊 日本左衛門

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義賊 日本左衛門

【Nコード】

N8446C

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

江戸中期、徳川吉宗の時代に天下を騒がせた大盗賊、日本左衛門が処刑された。関東から関西を股にかけて荒らし回った大盗賊。しかし、“盗みはすれど非道はせず”の真の盗賊の信念を貫き通した義賊。日本左衛門が処刑されてから時は流れ、現代になった頃に物語は遡る。京都市内の学校に通う高校一年生の荻原沙耶。彼女は、ふとした事で処刑された日本左衛門を甦らせてしまった。甦った日本左衛門は、戸惑う沙耶を無視して付き纏う始末。俺様野郎だが、非道を嫌う盗賊と現代に生きる少女の物語。

盗賊と女子高生（前書き）

この物語は、実在の人物を使ったフィクションである事を理解した上で読んで下さい。

盗賊と女子高生

「……沙耶姫、腹減った、飯」

京都市内にある、そこそ良いアパートの一室でランニングシャツにジーパンを着た二十代後半の男が気怠く甘えた口調で言った。

「私は姫じゃないって言ってるじゃないですか」「怒った口調で男を睨みながらもリビングに向かう少女。

「俺にとっては、光輝で美しい姫君だよ」少女の睨みを軽く受け流しながら男は笑った。

「もうっ、そんな事を言っつて恥ずかしくないんですか?!」「顔を真っ赤にしながら怒鳴る少女。

「沙耶姫だから言えるんだよ。他の女になんて言いたくもない」胸を張り堂々と答える男に沙耶は肩を落とした。

「……もう知りません」どこか拗ねた口調に男は小さく笑った。

『拗ねてる時も可愛いんだよね』

少女に言えば、確実に怒りを買うのは間違いないことだが、思わずには入られなかった。

今まで、こんな気持ちになったのは、過去に一度きりだったが再び、このような気持ちになるとは以外だった。

「……………これも何かの因果か？」

因果は巡ると言ったものだが、こんな因果なら受け入れたいと思う。

その位、目の前の少女に熱を上げているのだ。

この男、その昔に天下を騒がせた大盗賊の頭目、日本左衛門。

何故、江戸時代の人間が現代に生きているのかは不明だが、今の生活を楽しんでいる様子。

この物語は、現代に甦った義賊と現代に生きる少女の物語である。

盗賊と女子高生（後書き）

これからは、三つの物語を同時連載するので、少しの遅れは御了承
ください。

第一話・初めての出会い（前書き）

初めて日本左衛門と沙耶を題に書いてみました（恥）

第一話：初めての出会い

「……………はぁ」学校から帰る道で沙耶は、ため息を吐いた。

今日、憧れだったバスケット部の先輩に告白をしようとした時に、同級生が先輩と帰って行くのを目撃してしまったからだ。

『あの子、先輩と付き合ってるんだろっな』女の勘で何となく感じ取った。

「今になって思えば、何にも先輩と接点がなかったのに告白しても、無駄だったよね」

自嘲気味に笑いながら沙耶は何時も通る道に差し掛かった。

京都の三条通りの外れにある大盗賊、日本左衛門の首塚。

沙耶は中学に入ってからこの道を通っているが、今だに慣れない。

しかも今の時刻は夏の午後十一時。

先輩を待っていたらこんな時間になってしまっていたのだ。

「夏だと何時もの倍は恐いのに」

愚痴を言いながら薄暗い道に歩を進めた。

しかし、五分と経たない内に

「やっぱり四条通りから帰れば良かった」半べそになりながら後悔する沙耶。

びくびくしながら歩を進めていたが、何かに躓き盛大に転んだ。

盛大に転んだ為、制服は汚れ鞆の中身が散らばった。

「……拾わないと」

散らばった筆記用具や教科書を拾っている内に一筋の涙が落ちた。

「……ひっく、ひっく……えっぐ、ふっ、うっ……
ぐっ」

落ちた涙は、止まる事を知らずに嗚咽も止まらなかった。

泣いていると、首塚が視界に入った。

「……っにが……何が日本左衛門よっ、大層な名前なんかして」

何かに当たりたい気持ちになる沙耶。

「何が義賊よ！結局は泥棒じゃない！！」八つ当りに首塚を蹴り倒した。

ゴトッ

首塚は音を立てて地面に倒れたが

「痛ったー！！」首塚を蹴り倒した足を擦りながら沙耶は更に涙目になった。

「もっつ、最悪!？」

悲しみから怒りの感情に早変わりした沙耶は、ずんずんと進もうとしたが何かにぶつかつた。

「……っ、今度はなに？」鼻を抑えながら見ると逞しい胸板だつた。

「……」

嫌な予感を感じながら上を見ると、鋭い目付きをした二十代後半の男性と目が合った。

『ひい!? ヤクザ!?』勝手に職業を決めるな。

「ごめんなさい! 本当ごめんなさい!!」勢い良く頭を下げる沙耶。

「……おい、娘」低く鋭い声の上から聞こえてきた。

「退け座でも何でもします! だから、人身売買なんかしないで下さい!？」大粒の涙を流して逃げ腰になる沙耶。

「……」男は沙耶の態度に閉口した。

『黙っちゃったよっ、たぶん、どこの店に売るか考えてるんだ!？』
男の沈黙を思考に取った沙耶は、逃げようと踵かかとを返したが腕を捕ま
れ阻止された。

「……どこに行くつもりだ？」捕まれた腕を解こうとしなが
ら謝る沙耶。

「身体を売る以外なら何でもするので、どうか許して下さい」「拝
み倒す勢い良いで頭を下げる沙耶。

「なら、答える。ここは何処だ？お前は何者だ？」男の質問に沙耶
は、途切れ途切れに答えた。

「……ここは、京都の三条通りで、私は荻原沙耶です」

「京都？ここが京都だと？本当か」男は辺りを見回しながら尋ねた。

「は、はいっ」

「じゃあ、今は何年だ？」

「へ、平成、十九年、西暦2007年ですっ」

「平成？今は享保じゃないのか？」腕を離し肩を掴み揺らします男。

『この人、もしかして薬中か何か？』男の反応を見て沙耶は焦った。

「本当です！本当だから離して下さい！！」力の限り暴れたが、び
くともしなかった。

「俺は………死んだはずじゃなかったのか？」無意識に沙耶の肩を掴んでいた腕に力を込めた。

「痛いです！離して下さい！人を呼びますよ！！」大声を出すが、何の反応もなかった。

「……この墓は………」肩を掴んだまま横を見ると小さな塚があった。

「……に、ほ……ん……左衛、門の墓………」

呆然とした表情で塚を見つめる男の様子を見て、沙耶は何かを感じ取った。

『この人、何か変だ』

薬中か何かと思っていたのだが、本当に何が何なのか分からない様子だった。

『この人、まるで母親とはぐれた子供みたい』

呆然とする男は、親とはぐれた迷子の子供のように困り果てていた。

「貴方、名前は？どこから来たの？」沙耶は、男に恐る恐る尋ねた。

「……俺は、日本左衛門だ」

これが沙耶と男、盗賊、日本左衛門の最初の出会いだった。

第一話・初めての出会い（後書き）

感想評価を待っておりますので、よろしくお願い致します!?

第二話：盗賊と同棲（前書き）

うーす！大盗賊、日本左衛門様だ？！
したから有り難く読んで感想を寄越せ。

第二話を更新

第二話：盗賊と同棲

三条通りで出会った日本左衛門と名乗る男をそのまま置いて行く訳には、いけない沙耶は、自宅に連れて帰る事にした。

その間、日本左衛門は挙動不振だったが、除々に慣れ自宅に着くと話し始めた。

日本左衛門の話によると市中を引き廻しされ、五条河原で首を斬られた所までは覚えていたらしい。

「理由は分からないけど俺は、時代を越えて来てしまったんだ」

湯呑みを机に置き事の顛末を言い終える日本左衛門。

「これは、沙耶姫も少なからず噛んでると思うぜ」確信したように断言する日本左衛門。

「……………」沙耶も思い付く点があるのか黙っていた。

テレビで死者の魂が眠る場所の物を動かしたり壊したりすると、何らかが起きると……………」

『……………テレビで言っていた事が本当に起きるなんて!?!』

今更になって自分のした事に激しく後悔をする沙耶。

まさに後悔、後に立たずとは、この事だ。

「まあ、後悔より先の事を考えようよ。沙耶姫」

後悔の念に駆られる沙耶に気楽な態度の盗賊。

初めの時より随分と違うのは、環境に慣れた証拠だ。

「あなたは平気なんですか？自分の置かれた状況を理解しているの？」

日本左衛門の態度に反感を抱きながら、尋ねる沙耶。

「あの時代に居ても処刑されていたから、今の平成？の時代に来て良かったかな」

ソファーに身体を沈めながら答える日本左衛門。

「この時代は、俺の時代よりも色々と楽しそうな物に溢れてるし、優しく可憐な沙耶姫とも会えたから、文句ないかな」

どこまでも陽気な態度の盗賊に沙耶は、頭を抱えた。

「住む場所とか仕事はどうするんですか？」

「んー、仕事は何か見つけれらるし、住む場所は沙耶姫の家で良いんじゃない？」

当然と言わんばかりの爆弾発言に沙耶は当然の如く怒った。

「ちよ、何で私の家なんですか！？困ります！！」

「だって、他に頼れる知り合いなんか居ないし、俺を甦らせたのは、沙耶姫じゃないか」

頬を膨らませて拗ねた子供のような態度を取る日本左衛門。

「……………うっ……………」甦らせた事を言われては、ぐうの音も出ない沙耶。

「俺を甦らせたのには後は知らん振り？沙耶姫に捨てられたら乞食か……………また悪事に手を染めないといけないのか」

ため息を吐いて哀しそうに沙耶を見る日本左衛門。

「……………うう」何も言い返せない沙耶。

『確かに私が甦らせたのに知らん振りは出来ないし時代を越えたから頼れるのは私だけだし』

思い悩んだ末に沙耶は

「……………私の家に住んで良いですよ」と返事をした。

「沙耶姫！！」沙耶に抱き付く日本左衛門。

「きゃっ」小さく悲鳴を上げる沙耶を無視して、更に強く抱き締める。

「さすが天が遣わした姫君だ。こんな哀れな盗人に情を掛けてくれ

るなんて……………」

抱き締めていた手を離すと片膝を着いた。

「この大盗賊の日本左衛門様が、沙耶姫を生涯守ってやるよ」

胸を張り偉そうな口調で豪胆する日本左衛門。

「え？一生涯つて……………」
「言葉の意味を誤解したのか沙耶は真っ赤になった。」

「これから宜しくな。俺の姫君」

不敵な笑みを浮かべながら再び沙耶を抱き締める日本左衛門。

「……………」突然の告白？に赤面する沙耶。

こうして現役女子高生、荻原沙耶の苦難と波乱に満ちた同棲生活が幕を開けたのだった。

同棲相手、天下な名を轟かせた大盗賊、その名は日本左衛門。

年齢、二十七歳。

性格、天下無敵の俺様。

概要、江戸時代に処刑されたが時代を越え、荻原沙耶の家に強引に居候となった元盗賊。

第二話・盗賊と同棲（後書き）

・・・こんにちわ。荻原沙耶です。 第二話、どう

でしたか？日本左衛門さんの態度が悪くてすみません。

次からは、きつく言っておきますので・・・

第三話：盗賊の留守番（前書き）

更新が遅れてすみません。読んだら感想お願いします！？

第三話：盗賊の留守番

日本左衛門が半ば強引に沙耶の良心に付け込み同棲を始めてから早一週間。

幸い、沙耶の両親は二人揃って海外赴任で、年に一、二回帰って来る位だ。

そんな事もあり、二人の同棲は問題なかった。

同棲を始めた沙耶は手始めに日常生活の基礎を教え始めた。

開始から二日で日常生活に支障がない知識を身に付けた日本左衛門に沙耶は驚きを隠せなかった。

次にパソコンと携帯電話の使い方を教えた。

パソコンと携帯電話は父親のお下がりを与えた。

コンピュータ関係は少し手間取ったが、直ぐに物にして今では通販を出来るようにまでなった。

もう教える事もなくなった沙耶に日本左衛門は外に出たいと言い始めた。

日常生活の基礎もコンピュータも覚えたから、近くの店に買い物くらは行かせられたが今だに一人で外に行かせるのは危険だと判断した沙耶は、学校の日は家から出ないよう勧告した。

日本左衛門は少しブーイングを言ったが、直ぐに受け入れた。

そして今に至る。

「私が学校から帰るまで家の中で、大人しく待っていて下さいね？」

夏の制服に着替え鞆を片手に沙耶は玄関で、ジーンズに黒いTシャツの日本左衛門に言った。

「分かってるよ。俺、もう二十七だよ？そんな子供の留守番なんて簡単だよ」へらへらと笑う盗賊に沙耶は眉を潜めた。

「……本当ですか？」

「そんなに信用ない？それでも盗賊界では信用あったんだよ」肩を竦める日本左衛門。

「……分かりました。じゃあ、お昼は作って置いたご飯を食べて下さいね」

母親のような態度の沙耶に日本左衛門は笑いを我慢できなかった。

「……何を笑ってるんですか？」少し怒った口調になった沙耶。

「何でもないよ。それより早く行きな。遅刻しちゃうよ」

そんな沙耶の反応に楽しみながら日本左衛門は、送り出した。

「……それじゃ、行ってきます」渋々と言った状態で沙耶は

家を出た。

「さあてと、商売でも始めるか」

沙耶が学校に行つてから日本左衛門は、パソコンを起動し慣れた手つきで仕事を始めた。

沙耶が学校に居ない間に彼も自分なりに、現代の勉強をして少しでも、彼女の荷を軽くするように努めた。

元々、物事を理解するのは早い方で直ぐにパソコンの使い方をマスターした。そして、インターネットで商売が出来ると知ると独学で経済学を覚えた。

元盗賊だった事を活かしセキュリティ関係の仕事をした。

沙耶に内緒で外出した折りに知り合った男の伝手でセキュリティ関係の会社と手を組み、防犯システムや対泥棒システムを開発するなどの功績を上げた。

その礼として会社に就職し自宅で仕事をさせて貰っている。

ファックスで送られた書類を見ながらパソコンでデータを作成する日本左衛門。

「んー、この件は少し手間が掛かるな」

独り言を言いながらパソコンを操作する。

一方、日本左衛門を一人残して学校に行った沙耶は気が気でなかった。

『お昼、食べたかな？外出してないよね？』

などと勉強そつちの気で日本左衛門を心配する沙耶。

「……………はあ」教師に気付かれないように小さくため息を吐く沙耶。

「……………ふう、少し休憩するか」

書類を片付けていたが、休憩を取ろうと席を立つ日本佐衛門。

「コーヒーでも飲むか」

家にある物は自由に使って構わないと言われていたので使っているのだが、

「まず、やっぱり姫が淹れたコーヒーが一番だ」自分で淹れたコーヒーの不味さに不評を漏らしながらも飲む。

この世界に来てから、コーヒーや紅茶、炭酸飲料水と言った飲み物を知ってからコーヒーを好んで飲むようになった。

しかし、自分で淹れたコーヒーや他人が淹れたコーヒーは不味い。

『早く帰って来ないかな？ 姫？』 不味いコーヒーを飲み終えて仕事に戻ろうとした時であった。

「……ん、鼠か」 自分以外の者が家に入った気配を瞬時に気付く日本左衛門。

「ちょうど良い。 姫が居ないから寂しくて苛々していた所だ。 憂さ晴らしと行くか」

沙耶には見せた事のない笑みを浮かべる日本左衛門の姿は、 天下を騒がせた大盗賊の姿だった。

「………はあ、はあ、はあ、はあ」 沙耶は急いで鞆に荷物を入れ教室を出た。

午前の授業が終わり昼食になる時に教師から家に泥棒が入ったと言われたのだ。

『日本左衛門さん、大丈夫かな！？』 走りながら居候している元盗賊を心配する沙耶。

元盗賊とは言え、古風な盗賊。 現代の武器を持つ強盗に太刀打ち出来る訳ない。

「無事でいて！日本左衛門さん」元盗賊を心配しながら自宅に着いた。

「す、すみませんっ。こ、この家の者です!!」

近くの警官に話し掛ける。

「君が？じゃあ、こちらにどうぞ」

案内されて行くと

「あっ、お帰り。姫」警官と会話をしている日本左衛門がいた。

「大丈夫ですか?!」慌てて近付く沙耶。

「ん？心配してくれたの？ありがとう。姫」にっこりと笑って一目を憚らず抱きしめる。

「ちょっと何するんですか!？」突然、抱きしめられて驚く沙耶。

「ん？抱きしめてるんだけど？」首を傾げる日本左衛門。

「そうじゃない！」力の限り暴れる。

「あー、お取り混み中かもしれませんが……」警官が気まずい顔で話しかけて来た。

「この男性が、泥棒を捕まえたのですが知り合いですか？」

「え、ええ。私の母方の親戚です」

警官の質問に内心焦りながら冷静に答えた。

「失礼ですが職業は？」

『まずいつ』家に居候している元盗賊とは言えず、どうしようかと
思っていた時に

「職業？職業は、この会社に勤めていますか？」

警官達に名刺を渡す日本左衛門。

「っ！？」警官達に渡した名刺には、新セキュリティを造った事で
有名に会社名が載っていた。

しかも、肩書は開発部長だった。

「娘のように可愛がっていた沙耶が一人暮らしをしていると聞いた
ので、一緒に暮らしているんですよ」温かな表情に沙耶を労るよう
に頭を撫でる。

その姿は、中々な様になっていた。

「そうでしたか。大変失礼しました」納得して謝る警官。

「いえ、お勤めなのですから仕方ありませんよ」

「では、これで」一礼して警官達は去って行った。

「さあ家の中に入ろうか？沙耶」優しく肩を抱きながら呆然とする
沙耶を連れ家に入った。

こうして、日本左衛門は沙耶の保護者として地位を確立させた。

第三話・盗賊の留守番（後書き）

次回は早く更新するように努力するのでご了承ください

第四話・お叱りはごもっとも（前書き）

更新、内容が短くてすみません

第四話：お叱りはごもつとも

「……………」制服から私服に着替えた沙耶は、凄まじい形相で床に正座する同居人の元盗賊の男を睨んでいた。

「そんなに、怒らないでよ。沙耶姫……………悪気があつた訳じゃないんだ」睨まれた同居人は、途切れ途切れになりながら、睨む少女に謝った。

「就職しているなんて知りませんでしたよ？それに泥棒だって、かなり重症だって聞いていますけど？」

腕を組み不機嫌オーラ丸出しの状態の沙耶に日本左衛門は

「だ、だって、銃を持ってたし、あそこまで弱いなんて思わなかったから」途切れ途切れながら言い訳をした。

警察の話によると銃声を聞いた住民が通報し警察が踏み込んでみると床に倒れた強盗を足蹴にする日本左衛門がいたそうだ。

「全治一ヶ月だそうですよ？」

「えー！一ヶ月！？」驚愕する

「たかが前歯と腕の関節を外しただけで?!」

がっくりと肩を落とす。

「そういう問題じゃないでしょ!？」

「ひいつ、ご、ごめんなさい!？」自分より十歳も年下の娘に縮み上がる元盗賊の頭。

その姿は何とも滑稽な姿だった。

「しかも、就職したのも知らなかったし……………」

ぶすつ、と頬を膨らませる沙耶。

「あ、あれは、その……………」

「まあ、何れは就職しなきゃならないから、とやかく言つつもりはないです」

幾分、落ち着いた声で喋る沙耶。

「……………今回は許して上げます。一人の外出も許可します。だけど、今度こんな事したら許しませんよ?」

「わ、分かりましたっ」少女の身体から溢れ出す怒りのオーラに尻込みしながら日本左衛門は頷いた。

「本当ですか?」再度、尋ねる。

「わ、分かりましたから、お怒りを静めて下さい!沙耶姫!!」限界とばかりに日本左衛門は涙声で懇願した。

「……………その言葉、信用しますよ」やっと怒りのオーラを静める沙耶。

沙耶がリビングから出て行ったのを確認してから冷汗を出して、日本左衛門は床に尻餅を着いた。

『今度からは、下手に沙耶姫を刺激しないようにしよう』

改めて同居している家の女主人の怖さを実感する日本左衛門。

『しかし、この俺を怖がらせるなんて、あいつ以来だな』

江戸時代に居た頃、自分を尻に敷いていた妻を思い出す。

歳は沙耶より幾つか年上だったが、気丈な所も変に優しい所も似ている。

『この時代に流れたのも何かの因果か？』

「……………まあ、因果だろうが姐と一緒になら文句はないけどね」

「日本左衛門さん。夕飯の買い物に行きますよ！」玄関から沙耶の呼ぶ声が聞こえた。

さっきまでの怒りを含んだ声は何処にもなかった。

「いま行くよ！姐！？」少女の呼ぶ声に返事をしながらリビングを後にした。

第四話・お叱りはごもっとも（後書き）

マジ短くてごめんなさい!?!? すいません!?!

逸話：新婚夫婦（前書き）

更新遅れてすみません！

逸話：新婚夫婦

「日本左衛門さん、今日は何が食べたいですか？」

財布を片手に持ちながら沙耶は隣を歩く日本左衛門に尋ねた。

「ん、娘が作る料理なら劇薬が入ってようが、喜んで頂くよ」「さらにと爆発を沙耶に投下する日本左衛門。

「もう！真面目に聞いているんです！！」顔を赤く染めて怒ったが、全く怖くなかった。

「そんなに怖い顔しないでよ。怖くて、沙耶姫の寝室に忍び込みんじやうよ？」何故にそうなる？

「もう知りません！！」完全に怒ってしまった沙耶はずんずん先に進んだ。

そんな少女の後ろ姿を見ながら

『反応が可愛いくて、ついつい意地悪しっちまうだよな』

自分の行動が余りに子供染みて苦笑してしまう。

「なに一人でにやけてるんですか？」前を歩いていた沙耶が冷たい声で言った。

しかし、その言葉は本当に嫌っている感情がないのが手に取るように分かった。

「ごめんごめん。今日の晩御飯を考えてたんだよ」苦笑したまま立ち止まった沙耶に歩み寄る。

「決まったんですか？」探るような瞳で見られた。

この黒い宝石のような瞳に見られたい。その薄い桜色をした唇に口付けたい。

無意識に少女、特有の雰囲気を漂わせた沙耶に酔っていたのか沙耶が心配そうに見てきた。

「日本左衛門さん？」

「ああ、ごめん。今日は鯖の味噌煮が食べたいかな」

慌てて、適当に料理の名前を出した。

「鯖の味噌煮ですか？少し難しいですね」困った表情で答える沙耶。

「別に作れないなら構わないよ。沙耶姫は本当に優しいね」沙耶の艶のある黒髪を撫でた。

「……………ありがとうございます」気持ち良さそうな表情をする沙耶。

「さあ、早く買い物に行こう」

「……………はい」機嫌を直した沙耶と並んでスーパーに向かう。

しばらく歩いていると

「あら、沙耶ちゃんじゃない」前方から買い物袋を持った中年女性が沙耶に話しかけてきた。

「……こんにちは。おばさん」

行儀よく沙耶は立ち止まって頭を下げた。

「買い物？」

「ええ。晩御飯のおかずを買いに」

「そちらが強盗を捕まえた叔父さん？」興味深そうに日本左衛門を見た。

「初めまして。沙耶の叔父の月影左衛門と言います」

「変ね？沙耶ちゃんの両親って独りっ子じゃ？」

「それは、沙耶の父方の祖父が愛人に生ませたので公には出来なかつたんです」

日本左衛門の迫真の演技は素晴らしく簡単に騙せた。

「……そうでしたの」迫真の演技に騙され深くは詮索しなかった。

「これからも沙耶共々、お世話になると思うので宜しくお願いします」

「私でよければ、何時でも力になります」

「……ありがとうございます。さあ、行こうか？沙耶」

沙耶の手を掴んで歩み始める日本左衛門を見ながら

「沙耶ちゃん、見た目より大人に見えるから新婚夫婦みたい」

そんな事を言われたとも知らずに二人はスーパーへと足を進めた。

後日、二人は新婚夫婦という、あだ名を付けられた。

逸話：新婚夫婦（後書き）

読み終わったら何でも良いので感想を書いて下さい。

第五話・盗賊がお迎え（前書き）

何だか手抜きになってしまいました

第五話：盗賊がお迎え

スーパーで買い物を買って済ませ自宅に戻った沙耶はさっそく調理に取り掛かった。

「相変わらず姫は料理が上手だね」鮮やかな包丁捌きで魚を捌く沙耶に日本左衛門は舌を巻いた。

「小さい頃から両親が留守で祖母が料理を覚えてくれたんです」

「へえー、俺に何か手伝える事はある？」

「今の所は大丈夫です」

「でも、料理が出来るまで暇だよ。もう勉強する事はないし〜」どついても何かを手伝いたがっている様だ。

「それじゃ、お風呂を沸かしてくれませんか？」苦笑しながら言うと

「分かった」子供のように笑って浴室に向かった。

『何だか本当の子供みたい』そんな事を思いながら沙耶は料理に集中した。

「うん。この鯖の味噌煮美味しいよ」沙耶が苦労しながら作った鯖の味噌煮を日本左衛門は良く味わって頂いていた。

「ありがとうございます。ちゃんと出来たか心配でした」ほっと胸を撫で下ろす沙耶。

「大丈夫。これなら、店を出しても平気な位の出来栄だよ」

「そんな……」照れたように頬を染める沙耶。

「本当だよ。今まで生きてきた中で一番、美味しい料理だよ」

「ありがとうございます」ぺこりと頭を下げる沙耶。

「そう言えば、姫は将来の夢ってあるの？この時代だと好きな職業に着けるんでしょ？」不意に質問する。

「実はまだ、決めてないんです。そろそろ決めないと不味いんですけどね」苦笑しながら答える沙耶。

「友達とかはどうなの？」友達という言葉に沙耶の箸が一瞬、止まった。

「……さあ、皆、色々と忙しくて話す事も間々ならなくて」

「……」沙耶の表情に陰が差しているのを日本左衛門は見逃さなかった。

「……学校で何かあったの？」

「……………何も、なかったですよ」笑顔で答える沙耶。

『何か隠している』長年、働いてきた盗賊の勘から日本左衛門は沙耶の嘘を見抜いた。

『無理に聞き出しても口を割らないだろうな』沙耶の性格からして口を割る事はないだろう。

「……………そうそれなら良いけど。何かあったら相談してね？」

本当に心配した様子で言う日本左衛門に沙耶は笑いかけた。

「心配してくれてありがとうございます」

『この娘を守りたい』心の中で日本左衛門は、沙耶を守る事を心に誓った。

「さあ、食べましょう。美味しくなくなっちゃいますよ？」

「……………そうだね」沙耶の言葉に頷きながら食事を再開する。

翌日、何事もなかったように朝はきた。

「それじゃ、行ってきますね。日本左衛門さん」

「気を付けてね。姫」心配な表情の日本左衛門に

「大丈夫です。お仕事頑張ってくださいね」

二度目の行ってきますを言っつて沙耶は家を出た。

「……………」沙耶が出て行ったドアを無言で見っていた日本左衛門は不意に踵を返した。

リビングにある二人のソファーに身を沈めながら

『……………やっぱり何か隠してたな』

沙耶の笑顔が曇っていたのを見て確信した。

『しかし、姫の言葉を無視する訳にはいかないしな』

沙耶の事を思えば何かするべきなのだが、無理に詮索して不許を買う訳にもいかない。

『どうしたものか……………?』一人、頭を悩ませる日本左衛門。

しかし、リビングに置かれていた高校の入学式の写真を見て決意した。

「嫌われても姫の笑顔を守るためだ」

ソファーから立ち上がって財布と携帯を手に取ると家を出た。

一方、学校で勉強している沙耶は

“死ね！！根暗！？”

“消える”

“社会のゴミ”

クラス全体から虐めを受けていた。

黒板には誹謗中傷の言葉が延々と書かれ沙耶自身には紙屑などが投げられた。

「・・・・・・・・・・」沙耶は黙って耐え続けた。

沙耶の虐めは入学式が終わり初日から始まった。

沙耶が高校に入学してから両親は海外に住み込みで行ってしまったので、頼れる者もなく沙耶は虐めに耐えるしかなかった。

教師も見て見ぬ振りをしていて役に立たない。

仲の良かった友達も虐める側に周り孤立無縁の状態が二年間も続いた。

その間、沙耶は何も抵抗せずに耐え続けた。

ある意味、学校に失望したからなのかも知れない。

投げられるゴミを受け止めながら

『日本左衛門さんには言えない』

沙耶は居候の盗賊には虐められている事を言わないと改めて思った。

自分が虐められていると聞けば学校に乗り込んでくるだろう。

盗賊でありながら非道を嫌った日本左衛門。

その事を一緒に暮らしている沙耶は分かるのだ。

盗賊なのに正義感溢れる盗賊の日本左衛門を自分の些細な事で迷惑を掛けたくない。

沙耶は齒を食いしばり投げ掛けられる言葉とゴミの攻撃に耐えた。

第五話・盗賊がお迎え（後書き）

やっぱり手抜き作品になってしまいました（爆）
すいません
!?

逸話・焦りと心配（前書き）

更新が一番、遅れてすみません！しかも短編になりそうな展開です

逸話：焦りと心配

「……………くそつ」人気のない公園で日本左衛門は舌打ちをした。その表情は焦りに満ちていた。

家を飛び出し京都中を探し回ったが、少女が通う学校の制服を探したが見つからなかった。

『何処に入るんだ？』胸騒ぎが治まらず自分の無力さを改めて痛感させられた。

「くそつ。こんな事なら姫の学校の名前を聞いておくべきだった！」傍にあつた木を力任せに殴った。

「あら？月影さん？」背後の声で振り返ると先日買い物に行く時に会った近隣住民の女だった。

『この女なら姫の学校を知っているはず』

「こんにちわ。少しお尋ねしたいのですが、宜しいですか？」

内心は焦りながら冷静に努め友好態度を取る。

「なんですか？」

「実は沙耶の学校に行きたいのですが、引っ越して来たばかりなので地理が分からなくて」

困り果てた表情の日本左衛門の演技は抜群だった。

「まあ、そうでしたの。沙耶ちゃんの学校なら五条通りの月草高校ですよ」

案の定、女は自分が望んでいた情報をくれた。

「そうですか。ありがとうございます」

礼儀正しく一礼して去ろうとしたが呼び止められた。

「あの、沙耶ちゃんの事でもう一つ言っておきたい事が……」

女の深刻な表情を見て焦る気持ちが沸き上がったが沙耶の事と聞いて耳を傾けることにした。

「……………何です？」声を押し殺しながら尋ねる。

「実は……………」

女と別れた日本左衛門は急いで沙耶のいる学校に向かって走っていた。

『嫌な予感が当たっちゃった！』速度を緩めずに走りながら舌打ち

をした。

「実は沙耶ちゃん。虐められているって噂なんです」

女から聞かされた話は日本左衛門に大きな衝撃を与えた。

「単なる噂だと良いのですが、学校も黙認しているようです」

この話を聞いた日本左衛門は胸にどす黒い塊が動くのが分かった。

『俺の姫を傷つける奴は誰だろうと許さん』

あのはにかんだ笑顔に影をさす輩は許さない。

自分を家に泊めて世話をしてくれた菩薩の化身。

からかうと怒るが自分を気遣う事を忘れない。

その恩人に害なす者は神仏だろうが鬼だろうが容赦しない。

『教師だろう朝廷だろうが何だろうが、ぶっ殺してやる』

「姫、無事でいてくれ」

日本左衛門は近くのタクシーを拾い学校に向かわせて走らせた。

愛する女の無事を祈りながら……

逸話・焦りと心配（後書き）

もう少し私の駄作に付き合ってください（汗汗）

第六話：迎えに来た（前書き）

更新が遅れてすみません！

第六話：迎えに来た

「・・・・・・・・・・」

沙耶は誰も来ない一人だけの秘密の部屋である図書室の書庫室で一人昼食を取っていた。

「・・・・・・・・・・はあ」

これで何度目のため息を吐いたのだろうか？

一年の頃からずっと一人で食べて来たではないか。

何でため息を吐くのだろう？

「・・・・・・・・・・学校、早退しようかな？」

出席日数は足りてるから問題はないし、午後からの授業は家で予習したから大丈夫だ。

「・・・・・・・・・・よし、早退しよう」弁当を片付け帰る準備をしていると

「・・・・・・・・・・二年四組、荻原沙耶さん。お客様がお見えですので至急職員室までお越し下さい」

「・・・・・・・・・・お客様？」

思い当たる節がない為首を傾げる沙耶。

「……………まさか」

沙耶は居候の元盗賊を思い出した。

「だけど、場所は分からないはずだし……………」

考えれば考える程、不安は積もるばかりだ。

「……………行ってみよう」

沙耶は荷物を手早く鞆に入れて書庫室を出て行った。

職員室に行くと日本左衛門が担任の教師と話しているのが見えた

いや、会話よりも怒鳴り散らす日本左衛門を冷やかな目付きで見上げて対処する教師の方が正しいか。

周囲の教師達は一発触発の二人の空気に冷や冷やして固唾を飲んで
いた。

「だから、沙耶が虐めにあっているとやっているんだ!!」

「証拠もないのに決め付けないで下さい」

「なんだと?!」

「本人が何も無いと言っているのなら何も無いのでは?」

「……………貴様っ」

今にも殴り掛かりそうな勢いの日本左衛門。

「叔父さんっ」慌てて止めに入る沙耶。

「沙耶っ」

日本左衛門は沙耶の姿を見て安堵の表情をしたが直ぐに険しくなった。

「……………」無言で近づくと後ろに手を回された。

「……………」叔父さん？」沙耶は少し怯えたが、抵抗はしなかった。

後ろから手が離れると何やら紙が握られていた。

“ゴミは死ね”

いつの間に貼られていたのだろうか？

冷静に考えていると日本左衛門は凄まじい形相で担任教師の胸倉を掴んだ。

「こんな紙が沙耶の背中に貼られているのに虐めはないと言えるのか？」

「……………」

「お前、本当に教師か？」

「沙耶がこんな目に合ってるのに何もしないのか？」

「お、叔父さんっ。落ち着いてっ」

沙耶が間に入り日本左衛門を宥める。

「……………沙耶、今日はもう帰るぞ」

有無を言わずに沙耶の腕を掴むと職員室を出て行く日本左衛門。

「ちよ、叔父さん!!」

腕を掴まれ引き摺られるようにして沙耶は職員室を後にした。

第六話・迎えに来た（後書き）

こちらもクライマックスです!?

第八話：心配し無用（前書き）

後二、三話で終わる予定です!？

第八話：心配ご無用

沙耶を学校から連れて帰るまで日本左衛門は終始無言であった。

家に着くと乱暴にソファーに座らせられた。

「何で、黙ってたんだ？」

聞いた事もない抑圧の声に沙耶は怯えた。

いつも優しく親近感が沸く声と態度だったが、今回は違う。

全身から滲み出ているのは紛れも無く怒り。

こんな日本左衛門は初めてだ。

「何で虐めにあっている事を黙っていたんだ！？沙耶！！」

無言の沙耶に痺れを切らした日本左衛門が初めて怒鳴った。

「……………ッ」

びくつと身体を震わせる沙耶。

「……………す、すまない」

沙耶の怯えた態度に日本左衛門は齒切れ悪く謝った。

「勝手に学校に来て姫を無理矢理、連れて帰ってごめん」

「だけど、姫が悪い事に巻き込まれてるって予感がしたから」

「だから姫を迎えに行ったんだ」

怒られた子供のような口調と態度で謝る日本左衛門。

「……………んなさい」

「……………姫？」

俯いて呟いた沙耶の言葉が聞き取れず身体を屈める日本左衛門。

「……………虐めに、遭ってるって……………言わないで……………
……………ずっと、言わないで……………めんなさい」

「……………姫」

「私が、虐めに遭ってるって言ったら、日本左衛門さんが怒って学校に乗り込んでくると、思ったから言えなかったんです」

「私の事で、日本左衛門さんに迷惑を掛けなくなかったから、言えなかったんです」

「日本左衛門さんは、現代で立派な人間になって、生きてるのに、私なんかの為に苦しんで欲しくなかったから」

透明で綺麗に輝く光り輝く雫を流す沙耶の肩を優しく日本左衛門は引き寄せた。

「……………日本左衛門さん」

「姫は何も悪くないから謝らないで良いよ」

「悪いのは姫を傷つけた奴らだよ」

「それに俺は、姫の悩みで苦しんだりしないよ」

「逆に姫が一人で悩んでる方が俺は苦しいよ」

流れるように下まで伸びた黒髪を優しく撫でる。

「姫みたいに優しく可愛い女の子が、誰にも相談しないで一人悩んでいる姿を見ている方が苦しいよ」

「泣きたいなら泣いてよいよ。姫の涙を受け止める位の胸はあるから」

「ふえ……………」

糸が切れたように沙耶は声を上げて泣き出した。

「……………辛かったですよ?」

ポンポンと沙耶の華奢な身体を叩く日本左衛門。

「大丈夫。もう泣かないで良いよ。これからは俺が姫の不安や辛さを受け止めるから」

「だから大丈夫だよ」

「でも、それじゃ、日本左衛門さんが……………」

涙を流しながら日本左衛門を見上げる沙耶。

「俺の心配をこんな時までしてくれるなんて……………」
「やっぱり姫は優しく可愛らしい女の子だ」

「俺の事なら心配しないで良いよ。大丈夫だから」

暫らく抱き締めていると沙耶の小さな寝息が聞こえてきた。

眠った沙耶を日本左衛門は静かに抱き上げ寝室のベッドに寝かして部屋を出た。

『さて、これから俺の可愛い姫君を泣かせた不届き扱きの糞共にと
う報復をしてやろうかな？』

沙耶を寝かした日本左衛門は沙耶を泣かせた者達への復讐を考えていた。

『……………この俺を怒らせたんだ。最高の復讐をしてやる』

第八話・心配し無用（後書き）

……もう暫く付き合ってください。

第八話・出陣準備（前書き）

もう直ぐクライマックスです!!

第八話：出陣準備

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沙耶を寝かせた日本左衛門は与えられた部屋に向かった。

『姫を泣かせる奴は俺の敵だ』ギリツと唇を噛み眉間に皺を寄せた。

『あの教師の様子から見てあいつが頭と見て良いだろう』

長年の盗賊経験から虐めを支持しているのが担任の教師だと察知した。

『この手の奴らは力で従わされてるから頭を叩けば総崩れなんだよな』

頭を潰せば後は烏合の衆だけ。

烏合の衆は頭を失えばただの役立たずの集団。

何も出来ない。

「・・・・・・・・待っててね。姫。必ず俺が救って見せるから」

部屋の中に置いてあった箆笥の中から黒皮の兜頭巾に薄金の面頬、黒羅紗、金筋入りの半纏はんてんに黒縮緬しゆすの小袖を着、黒繻子しゆすの小手、脛当すねあてで、銀造りの太刀、神棒、腰に早縄を出した。

それはかつて自分が江戸時代に生きていた頃に盗賊稼業で身に着け

ていた盗みの装束。

沙耶の家に居候が決まった時に二度と着ないと心に決め箆筒の奥に閉まい鍵を掛けたが、まさかまた着る事になるとは思わなかった。

「……………もう二度と盗賊稼業はやらないと決めていたんだがな」

沈痛な表情をする日本左衛門。

「だが、事に至っては仕方ない」自分を納得させるように呟いた。

「……………」服を脱いで着物の袖に手を通す。

着物を着終え太刀を腰に差し神棒を持ち準備は整った。

「……………行つて来るね。姫」

一度、沙耶の部屋に行き眠る沙耶の額に口付けをした。

「……………さあ、盗め（つとめ）の始まりだ」

窓から出て夜の京都へと跳んだ。

「……………あの自尊心が強そうな男が行く所は決まって女が屯っている場所だな」

屋根から屋根へと飛び移りながら日本左衛門は呟いた。

「……………二度と姫に変な真似をしないように徹底的に痛めつ

けてやる」

神棒を握り締めながら凶悪な表情をする日本左衛門。

「沙耶姫を傷つけたんだ。この俺を怒らせたらどうなるか思い知らせてやる」

残忍な笑みを浮かべながら、どう料理するかを考えた。

担任の男を見せしめにして痛め付ければ沙耶は虐められないと考えた。

「……………待っているよ。クソ野郎。姫を虐めた罪をたつぷりと礼を込めてやるからな」

屋根から屋根へと飛び移り日本左衛門は闇の中を駆け抜け狙う獲物の居場所に向かった。

第八話・出陣準備（後書き）

後もう少しお付き合いです！？

第九話：復讐開始（前書き）

いよいよクライマックスです！

第九話：復讐開始

「・・・・・・・・見つけた」

暫らく屋根伝いに男を捜していたが、予想通り目的の男は女を侍らせながら繁華街を練り歩いていた。

「でさあ、今日そいつの叔父って名乗る男が来た訳・・・・・・・・・・」

男は女に昼間の出来事を話していた。

「そいつが沙耶が虐められているって見抜いて俺に掴み掛かってきて参ったよ」

「そうなの？ だけど、本当なんでしょ？ 虐められてるのは？」

女が愛嬌笑いを浮かべながら尋ねた。

「おお。 そうだよ。 担任の俺公認の虐めだよ！！」

酒に酔った男の口から衝撃的とも言える言葉が出てきた。

『・・・・・・・・やはりそうだったか』

予想はしていたが怒りを隠せない日本左衛門。

「だって、あいつさあー、見ててムカつくんだよね。 根暗だし愛嬌が悪いし・・・・・・・・・・」

次々と沙耶に対する悪口が男の口から漏れた。

『……あの男、このまま生かしておいては姫の身に害があるな』

一瞬だけ殺気立ったが沙耶の悲しい顔を思い出し思い留まった。

『殺しはしないが生き地獄を味合わせてやる』

太刀から手を離し耳を済ませる日本左衛門。

「それじゃ、私達はお店があるから失礼するわ」

女達はもう我慢の限界か愛想よく言っつて男から離れ来た道に戻って行った。

「やあね。ああゆう男って」

「ホントホント。女を虐めるなんて最低よね」

屋根伝いから聞こえてきた女達の声。

『かなり評判は悪いようだな。これなら恨みを抱く奴らは腐る程いそうだから殺しても良いが我慢するしかないよな』

ため息を吐きながら日本左衛門は繁華街を離れる男の後を追いついてミングを待った。

男はかなり酒に酔っていて足をふら付きさせながら近くの公園に向かった。

『どうやら天は俺に味方したようだな』

思わぬ幸運に笑みを溢しながら日本左衛門は屋根伝いに移動し公園に入った。

「……………ういー」男は公園のベンチに座り夜風に当たっていた。

「明日はどんな風に虐めてやるかな？」

意地悪な笑みを浮かべながら笑う男。

「……………生憎と貴様には明日は無い」

「あー、誰だ？」男は酔った眼差しを周りに向ける。

「……………ここだ。間抜け」

背後を振り返る男の顔面に神棒の先を叩き付ける日本左衛門。

「ぐっぶう」

男は血を出しながらベンチから落ちた。

「ふんつ。地べたに這い蹲るのが似合いだな」

侮蔑を眼差しを向ける日本左衛門。

「てめえ、何者だ！」男は鼻を抑えながら尋ねた。

「俺は大盗賊日本左衛門だ」

「日本左衛門だと？ふざけるな！大昔の泥棒風情の真似なんかしやがって！？」

男は吐き捨てるように言うと近くにあった棒を掴み襲い掛かった。

「……ふんっ」

落ち着いた態度で棒を避けると神棒で足を払い倒れ掛かった頭に蹴りを入れた。

「ぐわああああ」

男は頭を抑えながら呻き声を上げた。

「うるさい口だな」神棒を左手に持ち替え太刀を引き抜き男の頬を横一文字に斬った。

「は、はああああああ」男の頬は二つに割れ舌も割れていた。

「これで声は出せまい」太刀に付いた血を払い落とし鞘に収め神棒を持ち直す。

「さあ、これで心置きなく姫の恨みを晴らせる」

残忍な笑みを浮かべながら日本左衛門は神棒を握り締め男に近づいた。

その夜、公園では動物のような呻き声が一晩中聞こえたそうだ。

第九話：復讐開始（後書き）

後、一話で終わる予定なのでもう少しお付き合い下さい！？

エピソード・それから(前書き)

ついに完結です。

エピソード：それから

「……………日本左衛門さん。起きて下さい。朝ですよ」

「んんんー、後、十分だけ」枕に顔を埋めながら沙耶に願う日本左衛門。

「いけません！早く起きて下さい！？」

夏の制服にピンクのエプロンを付けた沙耶は日本左衛門を枕から引き離した。

「おはよう」。姫「日本左衛門は枕を引き離されると沙耶の胸に顔を埋めてきた。」

「ちょ、日本左衛門さん！いい加減にしないと本気で怒りますよ！？」

日本左衛門の態度に切れたのか大声で怒鳴る沙耶。

「うわぁー、姫が怒った」

怖がる振りをして日本左衛門は素早くベッドから抜け出し部屋から逃げた。

「待ちなさい！日本左衛門さん！？」

沙耶も日本左衛門の後を追うように部屋を出て行った。

日本左衛門が沙耶の居候になってから一年の月日が経った。

それまで色々な事があった。

沙耶の担任の男が公園で半殺し状態で発見され新しく担任になった時に同級生が学校に虐めがあったと報告し担任の男が首になった事。

それから虐めがなくなった事。

そして虐めが無くなってから三ヶ月後の夜に日本左衛門から結婚を前提に付き合ってくれと言われたのだ。

最初は戸惑いを隠せなかった沙耶だが、日本左衛門の真剣な顔にOKを出した。

問題は近所と自分の両親を以下に納得させるかだった。

しかし、近所の人達はある程度は気付いていたようだ。

両親が戻った時には近所の人達が日本左衛門の良さをこれでもかと言う位に両親に教えた。

それが功を呼んだのか、両親は二人の仲を認めた。

しかし条件付きだった。

沙耶が高校を卒業し大学を卒業する事。

日本左衛門が就職し沙耶を養える事。

この二つの内、日本左衛門は警備会社に就職し部長という肩書きを
持っている為クリア。

沙耶の方は元から頭が良い為、こちらの条件も今年の受験で無事に
大学に合格したので一段落が着いた。

「ほら、顔を洗ったらご飯を早く食べて下さい」

食器を洗いながら沙耶はタオルで顔を拭く日本左衛門を急かした。

「はいはい。奥さんの言う事は聞きますよ」

苦笑しながら日本左衛門はテーブルに座り箸を取った。

「お、奥さんってまだ結婚してないでしょ？」

奥さんと呼ばれ恥ずかしくて赤面する沙耶。

「もう結婚したようなものじゃないか？」

「こうして一つ屋根の下で暮らしてるんだし」

白米を口に入れながら味噌汁を飲む日本左衛門。

「そ、それはそうですね……」

「まあ、何れは新居を構えたいとは思っけど、それは姫が大学を卒
業してからかな」

「もうっ、日本左衛門さんったら」

エプロンを解き日本左衛門に投げる沙耶。

「はははははっ。可愛いね。姫はっ」愉快そうに笑いながらエプロンを受け止めて椅子に置き食事に集中した。

「それじゃ行つて来ますね」靴を履き鞆を持った沙耶を玄関口で日本左衛門は見送っていた。

「ああ。頑張りなよ」

「日本左衛門さんも仕事がんばって下さいね」

「ああ」

「行つてきます」

日本左衛門の頬にキスをして沙耶は玄関を出て行った。

「さあ、俺も仕事をやるかな」

沙耶を見送ると日本左衛門は仕事をやりに書斎に向かった。

江戸時代に名を馳せた日本左衛門は現代の京都で沙耶という女子高生と幸せに暮らしていると誰も知らない。

エピソード：それから（後書き）

ここまで付き合ってくれた。読者の皆様には先ずは感謝します。

短編になってすいません。

次回はまだ何を書くか決めていませんが、また和風物語でお会いしましょう。

番外編：奇跡の出会い（前書き）

かなり遅いですが、日本左衛門のクリスマス番外編です。

番外編：奇跡の出会い

「あつ、日本左衛門さんつ。見て見て！」

ダッフルコートに身を包み日本左衛門の腕を組んだ恋人の沙耶が指差す。

彼女と付き合い始めてから初めて過ごす冬。

始めは見る物すべてが奇怪な物でしかなかったが慣れると綺麗な物だ。

「何だい？姫」

恋人の指差す方向を見る。

そこには綺麗に飾られたクリスマスツリーがあった。

「綺麗ですね……………」

「……………そうだね」

二人は立ち止まってツリーの光を眺めていた。

12月24日、クリスマス。

先日、聖人であるイエス・キリストの誕生を祝う神聖な日だと沙耶から聞かされたのを思い出す。

『今の時代はキリスト教は認められているんですよ』

沙耶から言われた言葉を思い出す。

自分がいた時代はキリスト教を崇める者は全て女子供を問わずに磔、獄門、火あぶりの刑に処されていったがこの時代では罰せられない。

『平和な時代だな』

自分が住んでいた時代とはまったく違う時代。

そこで出会った麗しき天空の姫君とも言える位、慈悲深き娘であり自分の将来の伴侶。

少し怒りっぱい所も一人で背負い込む所も全てが愛おしい大切な娘。

『姫と出会えた事を今日、誕生したイエス・キリストという聖者に感謝する』

幼い頃から神仏など信じてはいなかった。

神仏など、ただの偶像に過ぎない。

……だが、今、ここで腕を組んでいる恋人との出会いは否定していた神仏にしか出来ない時空を越えた恋。

これは奇跡としか言えない出会い。

だから今日、誕生したであろう聖人、イエス・キリストに感謝せずには入られない。

「姫、そろそろ帰ろうか？」

暫らくツリーを見ていたが肌寒くなってきたのを感じ沙耶を促す。

「はい。日本左衛門さん」

恋人は直ぐに頷いてくれた。

「ねえ。姫」

「何ですか？」

アスファルトの道を歩きながら日本左衛門は口を開いた。

「今日はイエス・キリストっていう聖人が生まれた日なんだよね？」

「うん。だから聖なる日だよ」

「……俺は、これまで神仏なんて下らないと思っていただけ、今日、この場で姫と一緒に過ごせる事を心から神仏に感謝するよ」

空から降る雪を見ながら日本左衛門は言った。

「私も今日、日本左衛門さんと一緒に過ごせる事を感謝します」

沙耶も日本左衛門と一緒に空を見上げた。

それから真っ白い雪が降る中を二人は腕を組んで帰宅した。

番外編：奇跡の出会い（後書き）

作者が書いてる天魔、禁じられた遊びとは違う観点から見て下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8446c/>

義賊 日本左衛門

2010年11月14日09時17分発行